

「発問・助言」「発言の取り上げ方」編

さぬきの授業 基礎・基本

～ 子どもに学びのときめきを～

実践事例集Ⅰ



平成26年3月
香川県教育委員会

目次

I	はじめに	3
II	「発問」をテーマにした実践事例	4
○	「計画的、意図的に発問する」とは？	5
【小国】	何を考えればよいか全員に分かる「発問」	
【小体】	子どもの課題を浮き彫りにする「発問」	
【中社】	発見的検証を深めるための「発問」	
【小社】	事実に基づく根拠を求める「発問」	
○	「具体的かつ的確に発問する」とは？	7
【小生】	活動の広がり、深まり、方向付けを持たせる「発問」	
【中英】	子どもの発想を広げる「発問」	
【小家】	生活経験と実験結果とをつなぐ「発問」	
【中技】	個と集団をつなぐ「発問」	
III	「助言」をテーマにした実践事例	9
○	「子どもの思考を方向付ける助言」とは？	10
【中音】	広がり、深まり、方向付ける「助言」	
【中保体】	全体の場に広げる「助言」	
【中美】	学習を発展させる効果的な「助言」	
○	「誤答から学ぶ雰囲気をつくる助言」とは？	12
【中国】	意欲的な学習につながる「助言」	
【小総】	少数の気づきを全体で価値付ける「助言」	
【中家】	発言のよさを的確に評価する「助言」	
IV	「発言（考え）の取り上げ方」をテーマにした実践事例	14
○	「発言を他の子どもの思考の材料にする」とは？	15
【小算】	思考を段階的に深める「発言の取り上げ方」	
【小理】	葛藤を生かし、多様な考えを引き出す「発言の取り上げ方」	
【小図】	個と集団をつなぐ「発言の取り上げ方」	
【中数】	集団の学びを高める「発言の取り上げ方」	
【中理】	対話や気づきを促す「発言の取り上げ方」	
V	おわりに	17

I はじめに

本冊子は、「さぬきの授業 基礎・基本 ～子どもに学びのときめきを～」(平成 25 年 3 月 香川県教育委員会発行)に書かれている内容を小・中学校の授業で具現化した実践事例集 I 「発問・助言」「発言(考え)の取り上げ方」編です。

平成 25 年度は、香川県小学校教育研究会、香川県中学校教育研究会から合わせて 255 事例を提供いただき、本冊子では、その中から「発問・助言」「発言の取り上げ方」をテーマに 19 事例を紹介しています。

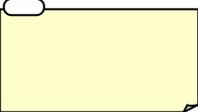
理解や思考を深めるためには、具体と抽象の行き来を繰り返すことが大切です。例えば一般的な問題解決的な学習では、活動 1 で 1 つのキーワード(抽象)を手がかりに、子ども一人一人が経験と結び付け、解釈(具体)を広げています【拡散思考】。そして、活動 2 では、広げた具体を整理し、調べや操作を通して抽象的な言葉にまとめています【収束思考】。さらに、活動 3 ではそのまとめを生活の場面に転用し、具体に広げています【拡散思考】。この収束と拡散を繰り返すことを通じて、理解と思考を深めていくことができます。

授業改善も同じことが言えると思います。教科等の枠を超え、学校種を超え、さぬきの授業として昔から大切にされてきた指導技術をまとめたものが「さぬきの授業 基礎・基本」です。その抽象化された指導技術を本冊子では、香小・中研 18 部会に広げ、具体的に落としもらい、事例を集めました。

提供していただいた事例を通して、「発問・助言」「発言の取り上げ方」の基礎・基本として大切な留意事項は何かということが具体的に見えてきました。本冊子で紹介している事例や留意事項をご覧ください。その基となる考え方を「さぬきの授業 基礎・基本」に求めたり、「さぬきの授業 基礎・基本」から「これは具体的にはどういうことなのだろう」と問いをもって本冊子を開いたり、合わせて日々の授業改善に役立てていただくことを願っています。

なお、本冊子で紹介できなかった残りの事例については、県教育センターのホームページ(URL <http://www.kec.kagawa-edu.jp/>)に掲載していますので、ぜひご覧ください。

【本冊子の見方】

- ・  . . . 「さぬきの授業 基礎・基本」からの抜粋
- ・ □～ . . . 実践を通して見えてきた留意事項
- ・ ■～ . . . 具体的な事例を紹介している項目
- ・  . . . 本時の目標
- ・  . . . 子どもの変容

Ⅱ 「発問」をテーマにした実践事例

「さぬきの授業 基礎・基本」には、「発問」の基礎・基本として次のように述べられています。

発 問

- ☆ 学習指導過程に沿って、精選し、計画的、意図的に発問する
 - 導入時の発問
 - 展開時の発問
 - 終末時の発問
- ☆ 学習を深めるよい発問の在り方
 - 1 簡潔、明瞭であること
 - 2 広がり、深まり、方向付けがあること
 - 3 具体的かつ的確であること

(「さぬきの授業 基礎・基本」3pよりタイトルを抜粋)

これを基にした実践では、次のようなことが明らかになってきました。

「発問の精選」について

- 「何をつかませるための発問か」を吟味し、各学習活動の目的に応じて精選する
- 発問について考える時間を確保するため、活動自体を精選する
- 「核となる発問」とそれ以外の発問で軽重を付ける
- 場と状況、子どもの意識に応じて発問しない選択も考えられる

「計画的・意図的な発問」について

- 「単元を貫く問い」との関係性をふまえ構造化する
- 子どもの考えを表出・整理し、考える対象を明らかにした上で発問する
- 導入時、モデルとの比較で子どものつまづきを可視化する
- 展開時、徐々に難易度を上げる
- 終末時、内容だけでなく学び方やコツも問う

「簡潔、明瞭な発問」について

- 「例えば？」で具体化、「つまり？」で抽象化

「広がり、深まり、方向付ける発問」について

- 情報を限定することで深まる
- 「気づき」を促す
- 教師のモデルを示しながら発問する

「具体的かつ的確な発問」について

- 「5W1H」「五感」「経験」を問う
- 子どもの意識を丹念に見つめ、反応を想定しておく

ここでは、■の項目について、事例を紹介します。

さぬきの授業 基礎・基本 I-2

「計画的、意図的に発問する」とは？

発問は、それを受け取る子どもたちに伝わるのがまず大切です。伝わるためには、今何について考えているのか、という思考対象をはっきりさせることが有効な支援となります。

小学校第3学年 国語 単元「お話を作って絵本展を開こう」

本時の目標：構成メモを手がかりに、読み手が楽しめるお話を書くことができる。

「もっとお話を膨らませるには、どうすればよいでしょうか。」と発問しても、子どもにとっては何をどう考えていけばよいのか、見当を付けるのは難しい。そこで、「時」や「場所」「様子」「気持ち」など書き足す観点を明示して発問することにした。

① 「お話をふくらませる言葉」を観点別に色分けした付箋紙で示し、

「自分の構成メモに必要な色の言葉は何でしょう。」と話をふくらませるよう方向付ける発問をした。

➡ これにより、書き足す観点が視覚的にはっきりし、多くの子どもたちが活動に参加できた。

② さらに、グループ交流の際、ふくらませる言葉が見付からない子どもに他の子どもがアドバイスできるように

「〇〇さんの文章に必要な色の言葉は何かを教えてください。」と他の子どもに助言した。

➡ アドバイスされた子どもは、何を書き足せばよいのかが明確になったことで、文章を書く意欲が高まり、自分の構成メモに考えを付け足すことができた。



【〇〇さんの文章に必要な言葉は何か？】

小学校第3学年 体育 単元「台上前転」

本時の目標：台上前転において、「スムーズに回ることができない」「着地がうまく決まらない」といった失敗の場面から課題を見出し、解決するために適切な練習の場を選ぶことができる。

台上前転をいくつかの場面に区切り、自分が練習しようと考えている場面にネーム磁石を貼らせた。すると概ね「失敗した場面を練習しよう」と考えた子どもと「失敗よりも前の場面を練習しよう」と考えた子どもの2つの反応に分かれた。例えば「着地がうまくできないから着地の練習をする。」という

考えと「着地がうまく決まらないから、踏み切りから着手の場面を練習する。」という考えである。ここで、「どうして、その練習場面を選んだのですか？」

と発問しても、「うまくできないから」という意識から考えが進まない子どもが多い。そこで、一連の動きの中で、失敗はその直前の動きに原因があることを気付かせるため、

「同じ場面の失敗なのに、どうして人によって練習する場所が違うのだろうか？」

と子どもたちの課題意識を浮き彫りにさせる発問を行った。

➡ すると「着地に失敗するのはそれよりも前に原因がある。」という意見が出された。その言葉を基に「失敗した場面より前の動きを意識する」という考えを導き出すことができた。

このように事前に想定した子どもの意識のずれを取り上げ、発問することで、課題意識や学習意欲を高めることにつながった。



【ネーム磁石で練習場所を選択】

中学校第2学年 社会 単元「世界の諸地域 アジア州」

本時の目標：トンレサップ湖で100万人もの人々が生活している背景を、豊かな漁場や工夫された水上家屋から読み取り、言葉で説明することができる。

「湖の中で暮らしている人がいる!？」

人口分布と地形図を重ね、驚いた生徒たちは、年間8～9mも水位が変化するトンレサップ湖の生活の工夫や知恵を追究していった。

雨季と乾季で生活環境が大きく変化するトンレサップ湖において、船や筏で水面に浮かばせる水上家屋の利便性を確認した上で、高床式住居（雨季の水面上昇に対して床下まで冠水を想定した住居）の写真を提示した。

そして、自然環境に合わせて暮らしている現地の人の営みに目を向けさせるため、「なぜ、水上家屋だけでなく高床式住居も必要なのか？」と問い、ヒントカード（右図）で雨季と乾季の水域の違いを示した。

このことで、雨季には水上で漁業、乾季には陸地で稲作をして生活できる高床式住居のよさを理解していった。



【生徒に配布したヒントカード】

小学校第3学年 社会 単元「学校のまわり」

本時の目標：写真の場所がどのコースにあたるかを考える活動を通して、それぞれのコースの特徴をつかみ、写真の場所の説明を絵地図に付け加えることができる。

本時では大きく二つの活動を行った。一つ目は写真を東西南北のコース別に分類する活動、二つ目は分類した写真に説明を付け加える活動である。

一つ目の活動では、

「どうして、東（西南北）コースだと考えたのですか？」

と問うのではなく、

「他のコースと比べてどのように違いますか？」

「そのコースだという根拠は写真の中にありますか？」

という発問を行った。ただ知っているから、ではなく、場所による違いを具体的に説明させるためである。

このように問うことで、子どもが根拠をもって写真を分けることができた。

二つ目の活動では、説明の書き方について「写真に写っていることだけだとレベル1、見学したことをもとに書いたらレベル2、他のコースと比べて書いたらレベル3」と評価の基準を助言することで、写真の場所についての説明を意欲的に行うことができた。

「計画的・意図的に発問する」とは、これらの事例のように、色分け・整理されている付箋紙【小国】やヒントカード【中社】などが子どもの手元にあたり、黒板上のネーム磁石【小体】や資料【小社】で子どもの立場や考えが表出されていたり、思考対象が明確化され、考える準備が整った状態で発問することと言えます。このことから、

■ 子どもの考えを表出・整理し、考える対象を明らかにした上で発問する

ことによって、より発問が有効に機能すると言えます。



【写真を分けた根拠を説明】

さぬきの授業 基礎・基本 I-2

「具体的かつ的確に発問する」とは？

思考対象が明確であったとしても、発問自体が抽象的では子どもに伝わりません。では、「具体的かつ的確に発問する」とはどういうことでしょうか。

小学校第1学年 生活 単元「あきみつけ」

本時の目標：秋の様子について話し合う中で、季節の変化について考え、秋への気づきを深めることができる。

「秋といえば何を思い出しますか？」と尋ねても、子どもがもつ秋のイメージは乏しく、また個人差が大きかった。そこで、子どもが具体物と関連付けて考えられるように、「草花」「生き物」「食べ物」「行事」「くらし」という「見付ける視点」について助言した。

➡ そうすることで自然だけでなく、くらしの中の秋にも目が向き、春や夏と比べながら考えよう、見付けようとしている姿が見られた。

また、実際に探す活動のときには、

『目で見える秋』『香る秋』『聞こえてくる秋』『味わう秋』『感じる秋』は、どんな様子の秋ですか？」

と発問した。

➡ この発問によって、子どもが五感を通して秋のイメージを具体化し、見つけた秋をワークシートにまとめる時には、自分なりの気づきを絵や言葉で豊かに表現することができた。



【あきみつけワークシート】

中学校第1学年 英語 単元「What do you have〜?」

本時の目標：What do you have〜?を用いた文を理解し、尋ねたり答えたりすることができる。

“What do you have〜?”を用いたコミュニケーション活動は、友達とお互いの朝食メニューを尋ね合うというものが多い。しかし、そのような活動では、生徒が工夫する余地が少なく、発想の広がりが見られにくい。

そこで、以下のような場面設定をして発問した。

「野菜を多く食べるにはどんなメニューにすればいいと思いますか？」

「幼児のためのメニューなら、どんなものがいいと思いますか？」

目的意識や相手意識をもって答えを考えさせるためである。

生徒は、朝食メニューについて、

“What do you have for breakfast?” “I have〜.”

を用いて会話をを行った。

➡ 生徒は、「体に良い朝食は？」「幼児に適した朝食は？」と考えを巡らせながら、伝えたいメニューの英語表現などについて自分から疑問を投げかけたり、一生懸命に英作文をしたりしていた。

さらに、友達のメニューを全体の場で紹介し合ったところ、友達が考案したメニューをきちんと紹介したり、間違えずに聞き取ろうとしたりするなど、前向きに活動に取り組むことができた。



【目的意識をもって対話している様子】

小学校第5学年 家庭 単元「寒い季節を快適に」

本時の目標：衣服の含気と重ね方による、あたたかい空気層の作り方・留め方を確かめる活動を通して、あたたかい着方の根拠が分かり、気温や生活場面等の状況や目的に合った着方を工夫することができる。

「重ねて着るとあたたかい服」を持参させた。しかし、「どうしてその服を選んだの?」と尋ねても、その理由はうまく説明できなかった。

そこで、目に見えない衣服内の空気層の存在やその効果を理解できるよう、衣類用圧縮袋を使って衣服の含気量を比較する実験を行った。

また、衣服にふくまれる空気の色による熱の伝わり具合の違いを実感できるように、空気の色が違う2種類の袋を氷の上に置き、それぞれの袋に手をのせて冷たさの具合を比較する実験を行った。**実験結果と生活を結んで具体的に考えさせるため、「実験結果から、衣服の厚さとあたたかさの関係で分かったことがあるかな?」と発問した。**

➡「私のもこもこジャンパーにはたくさんの空気が入っていたからあたたかいんだ。」
 「『空気の色』のおかげで外の冷たさを感じない。だから空気を多く含む服があたたかいんだね。」と、持参した服があたたかい理由を「衣服の厚さと含気量の関係」や「空気層の保温効果」とつないで考えることができた。



【あたたかさや空気層の関係を考える】

中学校第1学年 技術 単元「情報のデジタル化」

本時の目標：デジタル化による情報の表現方法や情報量について理解を深めることができる。

デジタル信号の「0」と「1」という難解な概念を理解させる手法として、図形を使った簡単なパズル解きの形式を用いた。

3×3のマスを塗りつぶす順番を決めておき、信号が「0」ならば空白、「1」ならば塗りつぶす約束で生徒に信号を送った。

「今から信号を送ります。アルファベットを解読しよう。」

「T」や「L」など簡単なものから、難易度を徐々に上げながら新たな課題を与えていった。その過程で、答えが「H」にも「N」にも解釈できる信号「101111101」を出題した。

「私が伝えようとした信号はそれではないんだけどな。」

信号がうまく伝わっていない状況を意図的に作ることで、正解に納得しない生徒の指摘を活用し、新しい考えを引き出したり信号の限界に気付かせたりした。

「では、どうしたら確実に伝えることができると思う?」

➡発見した課題を自ら解決するという流れを作ることで意欲化につなげることができた。またその中で、「情報の量」に気付いた子どもの発言やつぶやきを拾い上げ、次段階のテーマを設定することができた。

1	1	1
0	1	0
0	1	0

アルファベットのTを、
0と1の信号に置き換えて、

1	1	1	0	1	0	0	1	0
---	---	---	---	---	---	---	---	---

左から順番に一つずつ送ってみると・・・

3×3の信号では、

1	0	1
1	1	1
1	1	0

→ H
N

これらの事例から「具体的に発問する」とは、例えば、五感など考える視点を明確にする【小生】、目的意識・相手意識をもたせる【中英】、ことだということが見えてきました。また、「的確に発問する」ためには子どもの認識の壁はどこにあるのか、予め教材内容との関係の中でつまづきを想定しておくことが前提となる【小家、中技】ようです。これらのことから「具体的かつ的確に発問する」ためには、次のことがポイントとなります。

- 「5W1H」「五感」「経験」を問う
- 子どもの意識を丹念に見つめ、反応を想定しておく

Ⅲ 「助言」をテーマにした実践事例

「さぬきの授業 基礎・基本」には、「助言」の基礎・基本として次のように述べられています。

助言

- ☆ タイミングよく、子どもの思考を方向付けるように助言する
 - 態度・方向・目的・方法・技術などについて指導する
 - 学習上のつまずきを明らかにし、適正な判断に基づいて学習の改善を促す

- ☆ 学習を深めるよい助言の在り方
 - 1 意識して、暗示・称賛・激励を
 - 2 子どもをつぶやきを全体に広げて
 - 3 学習の「仕方」に関する事か「内容」に関する事かを区別して
 - 4 正しい・間違いだけに焦点を当てないで「誤答から学ぶ」雰囲気づくりを
 - 5 「ゆさぶる」ことで、知的好奇心の刺激を

（「さぬきの授業 基礎・基本」4pよりタイトルを抜粋）

これを基にした実践では、次のようなことが明らかになってきました。

「タイミングのよい助言」について

- 対象（子どもの考え）を視覚化した上で助言する

「子どもの思考を方向付ける助言」について

- 「考える視点と手順」を助言する
 - 意識の流れに沿って問題解決の手がかりとなる既習事項や経験を助言する
 - 技のコツを助言する

「称賛する助言」について

- 短い言葉で賞賛する
- 集団との関わりの中で賞賛する
- 見方・考え方を繰り返し価値付けする

「つぶやきを全体に広げる助言」について

- 他の子どもも共感でき、思考が深まるようなつぶやきに留意する

「誤答から学ぶ雰囲気をつくる助言」について

- 子どもが自分の言葉で語ることを価値付けする

「ゆさぶる助言」について

- 既習事項や生活とつなぐことで思考が深まる

ここでは、■の項目について、事例を紹介します。

さぬきの授業 基礎・基本 I-2

「子どもの思考を方向付ける助言」とは？

思考を方向付ける助言として、次の事例を挙げます。

中学校第3学年 音楽 単元「カンツォーネに親しもう」

本時の目標：5つの音楽的要素について楽曲の特徴に気付き、曲想を感じ取り歌唱表現を工夫することができる。

【本時の板書の一部】

まず、楽曲を特徴付ける「速度」「強弱」「奏法」「リズム」「音色」の5つの音楽的要素に関係する記号を板書で整理した。

「曲の中で何回も使われている記号は何ですか？」

と、頻繁に使われている「rit.」「a tempo」「フェルマータ」に着目させた。そして、

「記号により、ゆるめていったり、音をのぼしたりしていますね。これが何度も登場しているのはなぜでしょうか？また、どんな効果をねらっていると思いますか？」

と問い、この記号によって速度やリズム、奏法等に変化が生じていることに気付かせた。

さらに、曲の途中で転調していることの意味を考えさせるために、

「この曲は明るい曲ですか、それとも暗い曲ですか？」と問い、

「そうですね、“どっちも…”ですね。では、曲のどのあたりが暗く、どのあたりが明るいですか？歌詞の内容とも合わせてどんな気持ちの時か考えましょう。」

と助言した。

➡このことによって、感情表現をより豊かにするため、記号が使われていることや、美声を響かせることがカンツォーネの魅力であることに気付かせることができた。また、短調は、恋人に去られて寂しい気持ち、長調は恋人とともに過ごした楽しい日々の回想などと曲想と歌詞をリンクして考えさせることにより、表現の工夫へとつなげていくことができた。

中学校第1学年 保健体育 単元「サッカー」

本時の目標：チームでパスをつないで、ゴールを決めることができる。

サッカーのゴール（得点）を楽しむために、ゴールが決まらない理由を考える活動を設定した。

「パスが上手くつながらない」

と発言した子どもには、

「ボールを持たない選手の動き」に着目するよう助言した。

➡そうすることで、空いたスペースへの動きやディフェンスをかわす動きを発見できるようになった。

さらに、攻撃側の人数を増やしたアウトナンバーゲームやディフェンスの動ける範囲を制限したゲームを行った。そうすることで、考えた作戦が成功しやすく、ゴールの喜びを実感できるようになり、活動への意欲が高まった。また、ホワイトボードやVTRを活用し、成功したグループの考えや作戦をもとに話し合う活動を設定することで、自分たちとの違いに気付き、話し合いやチームでの練習の質が高まった。



【教師も話し合いに参加】

中学校第2学年 美術 単元「お茶のペットボトルの鑑賞」

本時の目標：身近なペットボトルのデザインにどのような工夫があるか気付くことができる。

鑑賞の視点を明らかにし、意欲的に取り組むための効果的な助言を工夫することで、話し合いに共通のテーマを持たせようと考え、実践した。

はじめ、

「一番よいと思うペットボトルはどれですか？」

と問いかけても、生徒の反応は鈍かった。何をもって「よい」とするのかという鑑賞の視点が漠然としていたためだと思われた。

そこで、

「では、お茶の会社の社員という設定で、売れるペットボトルはこれだ！と提案しよう。」

と投げかけた。

➡この助言により、持ちやすい「形」や「手触り」、涼しさや美味しさを感じるキャップやラベルの「色」など、生徒に鑑賞の視点が生まれた。そして、より自分がペットボトルを選んだ理由に説得力を持たそうと作品を細かいところまで観察し、積極的に自分の意見を発表することができた。このように、共通の視点を持たせることで、話し合いが活性化した。

このように、音楽的要素や動きのコツ等、考える視点を助言することによって、流れた後、動いた後は消えていく音楽や動きを子どもたちが捉えることができます【中音、中保体】。また、立場や状況を設定することによって、鑑賞の視点を明らかにすることができます【中美】。

ただ「考えなさい」と指示しても何をどこからどのように考えてよいのか分からない子どもにとって、こういった事例のように、考える視点や手順を示すことは考える手がかりとなると言えるでしょう。

つまり、思考を方向付けるためには

■ 「考える視点と手順」を助言する

ことが効果的と言えます。



【ペットボトルを鑑賞している様子】



さぬきの授業 基礎・基本 I-2

「誤答から学ぶ雰囲気をつくる助言」とは？

子どものつまづきを見極めてこそ学習を深めるよい助言となります。そのためには、子どもが自ら、自分の考えを表出したくなるような雰囲気づくりが必要です。

中学校第3学年 国語 単元 俳句「十六句」

本時の目標：俳句の基本的な形式や約束事を知り、俳句に詠まれた情景や心情を読み味わうことができる。

俳句に詠まれた情景や心情を自分の言葉でまとめ、話し合った。その際、間違った解釈もきちんと板書し、どの発表も適切な解釈に近づくためには大切なものと助言した。

「この発表があったから、『群青世界』を深く考えることができたね。」

と誤答のもつ意味を伝え、価値付けした。

部分的に正しい場合は、正誤の部分を明確にし、できる限りその解釈を生かすようにした。そして

「この解釈のおかげで情景や心情がよりはっきり見えてきましたね。」

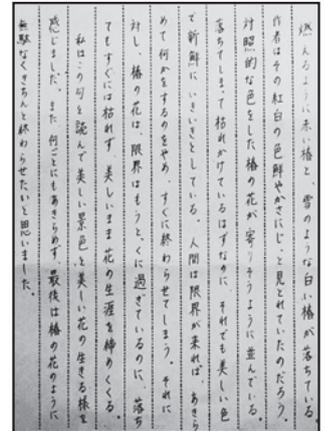
と評価した。

解釈が適切な場合も、全員が正しく理解しているかを確認するために、あえて

「今の説明で納得できますか？」

と尋ねた。

➡このようなことを通して、発表した子どもは「発表してよかった」と実感でき、自分の言葉で鑑賞文を書こうと意欲的に学習に取り組むことができた。



【生徒の鑑賞文】

小学校第6学年 総合的な学習の時間 単元「地域の絆を深める活動を成功させよう」

本時の目標：〇〇地区おやじの会会長の話を聞き、おやじの会の活動にこめられている思いや願いについて話し合い、まとめることができる。

おやじの会会長の話をまとめた子どものワークシートを基に、予め個々の気付きを見取り、補助簿に記録しておいた。全体交流では、子どもの意見を分類・整理しながら板書し、少数の子どもの気付きを視覚的に際立たせるようにした。

そして、少数の子どもしか気付いていなかった「地域に誇りをもってほしい」「伝統的行事を大切にしたい」という考えに理解が広がるように、補助簿を活用して意図的に指名していった。

さらに、少数の意見に立ち止まり

「どうして、『地域に誇りを』『伝統的行事を大切に』という願いがあると考えたの？」

と根拠を詳しく述べるよう助言した。ただ「すごい」と評価するのではなく

「あなたのおかげで、みんなの考えが一步進んだ。」

と全体との関係性の中でみんなの学びに役立つことを価値付ける助言を行った。

➡そうすることで、少数の気付きを全体に広げ、学級全体で共有することができた。そして、自分もみんなが気付かないことを見付けたい、というそれぞれの意欲にもつながった。

② G, I	④ B, F, G	⑧ B, C, E	⑫ D	⑮ Δ	⑳ F, B, G
⑥ G	⑩ B	⑭ B, G, J	⑰ G	⑳ B, G, I	㉑ C, B, G, I
⑬ B, G	⑯ Δ	㉒ B, G, A	㉓ Δ	㉔ Δ	㉕ Δ
① Δ	⑦ G, B	⑪ C, G	⑱ B, G, J	㉖ Δ	㉗ B, G, H

【補助簿の活用】



【少数意見が視覚的に分かる板書】

中学校第2学年 家庭 単元「住居の機能と住まい方」

本時の目標：家族の安全を考えた室内環境の調べ方を知り、快適な住まい方を工夫することができる。

室内事故の防ぎ方を考えた。

教師 「どうしたら階段からの転落事故を防げますか？」

生徒 「階段に手すりをつけたらいいと思います。」

教師 「事故を防ぐには、行動面と環境面の両面から考えるとよかったですね。この意見は環境面から考えたよいアイデアですね。環境の視点からどんどんアイデアを考えていきましょう」
【発言のよさを的確に評価】

生徒 「滑り止めのテープをつけるといいと思います。」

教師 「滑り止めテープははがれやすいものですが、どうしたらよいですか？」【意見を促す】

生徒 「両端に貼ったらいいと思います。」

教師 「昼間の場合に有効な意見ができました。では、夜はどうしたらいいですか？」

【視点を変える発問で、意見を促す】

生徒 「僕の家ではトイレ前の廊下に足元灯がついています。夜、電気をつけなくても歩けます。」

生徒 「電気のスイッチが、夜でもわかるように、ほんのりオレンジ色に光っています。」

教師 「蛍スイッチですね。フットライトとともに、どちらも夜、有効ですね。」

【意見をまとめる】

➡ このように、発言を価値付けする助言を行ったり、視点を変える発問をしたりすることによって、個々の学びを集団の学びへと高めることができた。

これらの事例のように、正答への理解を深めるよう誤答を価値付けし、子どもの発言をつないで正答に導いたり【中国】、補助簿を活用した意図的な指名や構造的な板書によって、少数意見に注目を集め、他者との関係の中でその価値を認めたり【小総】、子どもの発言について既習事項との関係の中で意味付けし、発言のよさを的確に評価したり【中家】することを積み重ねていくことによって、教室に誤答から学ぶ雰囲気や自ら自分の考えを表出しようとする雰囲気ができていくことが分かりました。

よって、「誤答から学ぶ雰囲気をつくる助言」とは、教師が、誤答や少数意見を発言した子どもの意図や背景に思いを馳せ、発言を真理へのプロセスに位置付けたり、共に学ぶ集団の考えの発展に貢献したことを評価したりするなど、

■ 子どもが自分の言葉で語ることを価値付けする

ことだと言えます。



Ⅳ 「発言（考え）の取り上げ方」をテーマにした実践事例

「さぬきの授業 基礎・基本」には、「発言（考え）の取り上げ方」の基礎・基本として次のように述べられています。

発言（考え）の取り上げ方

- ☆ なぜ全体の場で発言させるのか？
 - 集団としての学びを高めるだけでなく、個としての学びを高めます
 - 個としての学びを共有することにより、集団としての学びを高めます

- ☆ 発言を取り上げ、学級みんなのものにするのは、教師の役割
 - ① 子どもの発言は顔を見て聞く
 - ② 発言のよさを的確に評価し、授業に生かす（内容・態度）
 - ③ 発言に対して、意見を促す
 - ④ 発言者の考えを他の子どもの思考の材料にする工夫をする
(「さぬきの授業 基礎・基本」6pよりタイトルを抜粋)

これを基にした実践では、次のようなことが明らかになってきました。

「子どもの顔を見て聞くこと」について

- 肯定的に聞く

「発言のよさを的確に評価し、授業に生かすこと」について

- 価値観の変容を価値付けする

「発言に対して、意見を促すこと」について

- 「今の意見についてどう思いますか？」と意見をつなげることは、新しい問いを生み、考察することに効果がある

「発言を他の子どもの思考の材料にする工夫」について

- ノート、補助簿を活用して個々の考えを事前に把握し、反応を想定しておき意図的に取り上げる
- 誤答に対する反論を軸に反応を組織化する
- 個の悩みを全体に相談する
- 友達の発表を自分のことばで言い換えることを求める
- KJ法やマトリクス法など意見の整理が必要
- 言葉を補う支援により、意味の共有化が必要
 - ・資料や作品を指示棒で指し示しながら
 - ・教材提示機の活用
- 「話す」「聞く」話合いのルールの徹底が必要

ここでは、■の項目について、事例を紹介します。

さぬきの授業 基礎・基本 I-4

「発言を他の子どもの思考の材料にする」とは？

次に示す事例では、発言を他の子どもの思考の材料にするために、様々な工夫をしています。

小学校第2学年 算数 単元「かくれた数はいくつ」

本時の目標：減る前の数を求める逆思考の問題を、テープ図にかいて考え、解くことができる。

子どもがあそんでいました。
そのうち13人が帰ったので、18人になりました。
はじめは何人いましたか。

「 $18-13$ 」「 $18+13$ 」「 $13+18$ 」という3つの意見が出たため、①②の順に考えを取り上げることにした。

- ① 「『帰った』から引き算」という考えを取り上げ、たし算かひき算かを話し合った。

「問題文に『帰った』と書いてあるから引き算です。」という考えを取り上げ、それに対する反論から学び合いにつなげていった。

「『はじめの数』は、『残りの人数』と『帰った人数』を合わせるからたし算になるよ。」とテープ図を指したり手を動かしたりしながら題意を説明し、たし算になることを確かめた。

- ② 「 $18+13$ 」と「 $13+18$ 」の考えを取り上げ、意味の違いを比べた。

テープ図や問題場面のペープサートを用いて説明することで18人に、帰った13人を戻したから「 $18+13$ 」、帰った13人と残りの18人を合わせたから「 $13+18$ 」とそれぞれの式の意味の違いを確認することができた。

→計画的・意図的に「発言」を取り上げ、話し合いや操作を通して、子どもの思考が段階的に深まり、正しい立式に導くことができた。



【手の動きでたし算になる理由を説明】

小学校第6学年 理科 単元「ものの燃え方と空気」

本時の目標：線香の煙の動きやろうそくの炎の燃焼時間などから、物が燃焼するための条件について推論しながら調べ、物が燃焼するためには絶えず空気が循環する必要があることに気付くことができる。

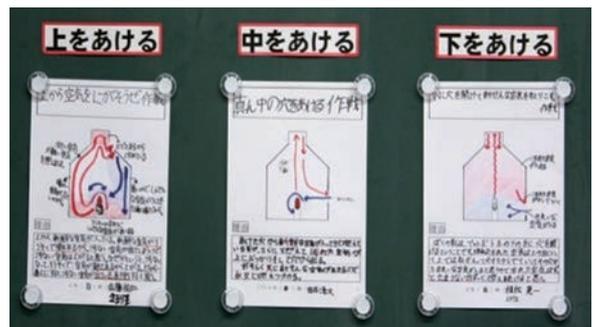
前時までの学習において、物が燃焼するための条件について、子ども一人一人が何を根拠としながらどのように予想したのかを把握しておくようにした。そして、本時の予想を話し合う場面において、

- 既知や経験を拠り所としながら予想が立てられている子ども
- 誤概念につながる考え方をもっているが、こだわりをもって問題解決に取り組もうとしている子ども

このような子どもの発言を取り上げ、全体に広げるようにした。

→そうすることで、話し合いが活性化し、それまで明確な根拠をもつことができていなかった子どもも自分の考えを整理していくことができた。

こうした予想の段階を経た子どもたちは、見通しをもって実験に取り組み、実験過程についても面白さを感じるようになった。また、発言の取り上げ方を工夫することで、子どもの主体的な問題解決につながった。



小学校第5学年 図画工作 単元「はじまりのまちプロジェクト」

本時の目標：色から受ける感じや色の組み合わせの効果を捉え、表したいイメージの効果的な表し方を工夫している。

豊かな表現の展開につながる個の気づきを意図的に取り上げ、個が感じている問題について全体で話し合った。

➡「友だちを助けるアドバイスがしたい」と意欲が喚起され、話し合いが活性化した。

児童 「きらきらと輝いている感じを表したいけど、何だかうまくいかないな。」

教師 「そのイメージが表れるようにどんな工夫をしたの？」

児童 「黄や橙で塗って見たんだけど、もっと輝いている感じを出したいな。」

教師 「〇〇さんが『きらきら輝いている』感じをもっと強調したいらしいのだけど、みんなだったらどのように表しますか。」

児童 「黄や橙の明るい色だけでなく、逆に紫や黒など、暗い色を少しだけ組み合わせたらいいんじゃないかな。」

➡個の問題を全体で考えることで、個の問題を解決するだけでなく、「色を組み合わせる際に加減が大事」という豊かな表現を展開する際の視点を全体で共有することができた。



【個別指導の中で】



【全体の場で】

中学校第3学年 数学 単元「関数 $y = ax^2$ 」

本時の目標：ボールが斜面を転がる様子を観察する活動から、既習の関数とは異なる関数を見出し、既習の関数との比較を通して、新しい関数について考察する。

まず、生徒一人一人が、ボールが斜面を転がる様子を観察し、表やグラフに表し、既習の関数とは異なる点を見つけ出した。その際、教師は子ども一人一人の考えを把握し、集団の学びが深まるような発言の順番を決定した。

生徒1 「時間が経つと、ボールの場所が変わります。」

教師 「〇〇さんの考えを他のことばで言い換えることはできますか？」

生徒2 「時間が変わると、ボールの進んだ距離が変わります。」

教師 「より関数的な表現になりましたね。進んだ距離について、他に気が付くことはありませんか？」

生徒3 「1秒ごとのボールの進んだ距離は、一定ではありません。」

教師 「今まで勉強してきた関数とは、何か違うようですね。〇〇さんの意見を具体的に説明してください。」

など、子どもの発言をつないでいき、個の学習を全体の学習へと広げ、深化させていった。

また、全体の学習を充実するために、個別学習において子ども一人一人に声をかけ、ノートに赤丸をつけるなど、積極的に賞賛や助言を行った。

➡そうすることにより、子どもは積極的に考え、発言もより一層活発になった。

中学校第1学年 理科 単元「光の世界」

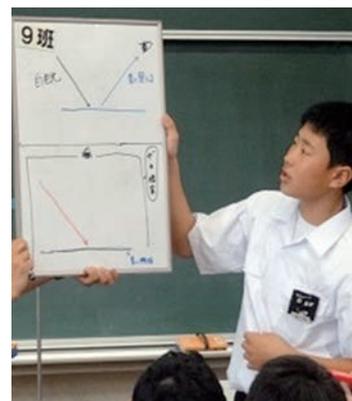
本時の目標：光源のまったくないところでは、ものはまったく見えないことについて理解することができる。

ほとんど光の入らない暗室の中で、「鏡・アルミ・ガラス・消しゴム」の中から見えるものを選択させ、その根拠を考えさせた。

「アルミは暗室でも見える」という発言を取り上げ、この意見をもつ者をパネラーとし、フロアーと意見を交換する場を設定した。

以下にパネラー（パ）とフロアー（フ）の発言を示す。

- (パ) アルミは暗い所でも見えたのでアルミは見える！
- (フ) アルミが見えたのは光源の光が少しあったからでは？
- (パ) アルミは金属光沢があるので光を発して見える！
- (フ) 金属光沢は光源の光を反射させるから見えるのでは？
- (パ) そうか…でも真っ暗で電灯は消えていたし…。
- (フ) 星は？街灯の光は？他に光源の光は入ってなかった？
- (パ) あっ！光源の光が少し入ってきたから見えたのか。



【パネラーを務めるグループ】

このように、これらの事例では発言を他の子どもの思考の材料にするために、予め取り上げる反応を想定し、取り上げる順番などの見通しを立てたり【小算・小理】、個の考えを全体に広げる工夫をしたり【小図・中数】しています。また、子どもに進行を任せることで意見の広がりを期待しています【中理】。

よって、発言を他の子どもの思考の材料にするためには

- 誤答に対する反論を軸に反応を組織化する
- 個の悩みを全体に相談する
- 友達の発表を自分のことばで言い換えることを求める

などの支援が有効と言えます。

V おわりに

「さぬきの授業 基礎・基本」の指導技術を実践してみることによって、「発問・助言」と「発言（考え）の取り上げ方」には密接な関連があることが見えてきました。

発問と助言は、学習指導の場においては、表裏一体となつてなされるものであるが、発問や助言の基本的な性格を知った上で、毎日の学習指導に生かすことが大切である。

・・・(中略)・・・発問とは、学習者の可能性を引き出し、それを伸ばし、発展させようとするために、学習に対して教師が出す「問い」である。従つて、発問には答えが要求される。助言とは、個人差の大きい各学習者に、個々の学習上のつまずきやポイントを理解させ、以後の主体的学習を支援するために教師が行う「口ぞえ」である。・・・(中略)・・・発問が学習指導過程に沿つてあらかじめ計画的になされるのに対して、助言は、学習中に随時行われる。

(平成25年度「新しく教員になつたみなさんへ」55p 香川県教育委員会)

このように、従来、発問と助言の関係性については言及されてきましたが、「発言の取り上げ方」との関連については、あまり意識されてこなかったかもしれません。

実践を振り返ってみますと、効果的な発問・助言は、その言葉単独で存在するのではなく、それまでの子どもの意識の流れの上に立ち、思考対象が見える形にした上で発せられていました。つまり、発問・助言の有効性は、子どものどの「発言（考え）」を取り上げ「るか」によって左右されるということです。逆によい「発言（考え）」の取り上げ方とは、表出された個の考えを深めたり広げたりすることでした。よつて、考えを表出させるための発問・助言がその成否の鍵を握ります。

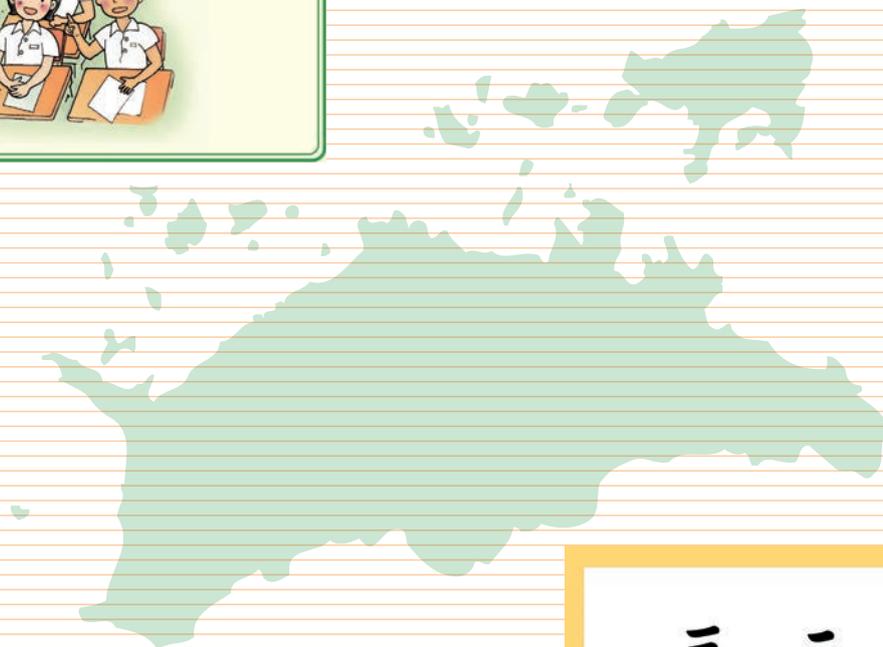
授業の終末にどんな子どもの反応を取り上げようとするか、という出口を具体的に想定すること、そのために、どのような活動や発問・助言が必要となるのかという入り口を予め吟味しておくこと、出口から入り口を考える授業づくりが求められます。

さぬきっ子 学びの三訓

- 一 準備して
- 二 姿勢整え
- 三 しっかり聞こう



香川県教育委員会



さぬきの教員 かかわりの三訓

- 一 共感的に受け止め
- 二 チームの力で
- 三 毅然と粘り強く



香川県教育委員会